

大久保利謙 著

## 『明六社考』

高橋 昌 郎

本書は、『明六雑誌』の復刻にさいして著述されたもので、明六社ならびに『明六雑誌』についての解題の決定版といつてよいだろう。その構成は、明六社と『明六雑誌』、明六社関係史料編という二部から成っているが、史料編に、最近東京大学に寄贈された加藤弘之の日記にある明六社関係記事を収めているのが貴重である。

もともと明六社は非常に有名であるにもかかわらず、その史料としては、明六社の記録・文書ともに現在には全く残っていない。ただ刊本の『明六雑誌』があるだけである。明六社の主旨・機構の基本を示す最初の「明六社制規」も、明治七年三月に『明六雑誌』と同時に発行されたものである。また、明六社成立の経緯も、その大要を語っているものに、西村茂樹の自叙伝である『往事録』（明治三十八年刊）と、森有礼の「明六社第一年会役員改選ニ付演説」（『明六雑誌』明治八年二月、第三十号）の二文獻があるのみ。

こうして、現在、明六社の動向を知ることのできる基礎史料は、社長森有礼の書翰が二通と社員加藤弘之の日記、それに外部史料として、明六社演説の熱心な聴講者であった植木枝盛の日記と新聞記事ということになる。新聞は『郵便報知新聞』を主として、『朝野新聞』『東京日日新聞』などである。とくに『郵便報知新聞』は、この新聞の発行所である「報知社」が、『明六雑誌』を印刷し発売していたのであり、明六社と密接な関係をもっていた。

そこで、本書の第二部としてある「明六社関係史料編」をみると、そこには、次のような史料が収められている。

- 一、明六社制規（明治七年三月制定ならびに八年五月改定のもの）
- 二、明六雑誌発行趣旨
- 三、『明六雑誌』総目次・執筆者別索引
- 四、論文補遺（西周の明治八年一月十六日明六社演説「海関税ノ説」）
- 五、諸新聞掲載明六社関係記事
- 六、森有礼書翰（二通、明治六年十月十九日の鮫島尚信宛ならびに八年三月七日の高木三郎宛）
- 七、加藤弘之日記抄
- 八、福澤諭吉著『福澤全集緒言』抄（「会議弁」の部分）
- 九、清水連郎「瑞穂屋卯三郎のこと」抄
- 十、植木枝盛日記抄

右の史料をもとにして、とくに従来、明六社研究に使用されなかった新史料の森有礼書翰と加藤弘之の日記を用い、それに上記の外部史料を活用して第一部の解説が記されている。次にそれを紹介しよう。

森の鮫島宛書翰によると、森は帰朝以来、「書籍院会社」（図書館）と「学術、文社」の二つのソサイエティー組織に着手したという。後者の「学術、文社」が明六社のことである。この書翰が、森の「学社」（明六社）発想のそもそもの由来を語っている。これでわかるように、明六社は、アメリカ駐在時代の日本文化改革論にもとづくもので、森の *Education in Japan, 1873* の主張の具体化の第一歩であった。この学社は、本来、*The Society of science, technique and literature* であるものを、一般に親しませるために、明六社としたのであらうと著者はいう。

この発足当初の模様について、さらに加藤弘之の日記を史料として再構成している。まず著者は、この加藤日記を史料編に掲載するのに、森有礼が帰朝するより少し前の六月から始めている。これは、旧幕時代からの洋学者仲間が、このころにおいて交際を密にしていたことを示し、森の呼びかけに応じてすぐに明六社が結成される基盤のあったことを示そうという配慮によるものである。

加藤日記のその部分を次に引用してみよう。

（六月）

廿五日 陰夜雨

参朝（侍講進講）○西招キニより参ル、同坐津田、榎釜（榎本武揚）、林研海、杉（亨二）等ナリ、洋食、夜十時過帰ル、榎本北海道へ参ル送別のよし

廿八日 雨

参朝○津田招キニより四時参ル、洋食、榎本、細川（潤次郎か）、西（周）、内田（正雄か）、杉、箕秋（箕作秋坪）、其外二三名、夜十字前帰ル

（七月）

十五日 晴アツシ

参朝○午後三字より杉の招キニより参ル、洋食、津田（真道）、西、箕秋同坐

（八月）

十八日 晴

午前八時より市川（兼恭）、津田へ参リ、夫レより上野辺散歩、夫レより下町散歩、露月町鳴門（義民）へ参ル、留守夫故芝ニ伊セ（勢）源へ参リ鳴門ヲ招キ一酌、帰宅八時比

廿一日 晴

昨夜より正矩不快のよし故一寸参ル、但シ今朝ハ少々よろしきよし、夫レより散歩、森有礼宅へ参ル、又夫レより散歩、ヨセ

（九月）

九月一日 陰雨晴

在宿○午後山内金次来ル○五時前森公使招キニヨリ参ル、同坐津田、西、中村敬太郎、箕作秋坪、西村鼎（茂樹）ナリ、夜十一時比帰宅

このように、八月二十一日に、明六社関係の記事がはじめて出る。九月一日の会合が明六社集会の第一日らしい。この日に同人の顔ぶれもほぼ決定し、

「学社」は事実上発足したとみられる。

明六社という名称は、はじめはきめられていなかったらしく、加藤日記によれば、七年二月十六日から、「明六社会議」「明六社」の名称がはじめてあらわれる。「明六社」の名称は、このころに決定したものらしい。七年一月十六日から、築地二橋の洋食店精養軒で会合するようになったが、この精養軒との関係も加藤日記によって推測できる。この精養軒というのは、かなり高級の食事を出している。

このように著者は説明している。

また、加藤日記によって、『明六雑誌』の「出版中止」(解散ではない)以後も明六社の会合が続いていたことが裏付けされるが、その九年から十一年までの明六社関係記事を、著者は抄出している。それによると、依然として毎月一日、十六日に会合していることが知られる。

次に、明六社が活動を開始してからの動きは、『郵便報知新聞』に主に報じられている。それは、同新聞の告知欄、府下雑報欄が中心であるが、その他の新聞を含めて、社説欄、投書欄、寄書欄の記事もある。

『郵便報知新聞』は、七年三月九日、第二八六号の告知欄に『明六雑誌』の発刊予告を掲載したが、明六社の結成の最初の公表であった。実際に発行されたのは四月二日であるが、著者はまた、はじめ、『明六社雑誌』と「社」が入っていたことを指摘している。「明六社雑誌」がフルネームのわけであるが、表現としては簡潔に「明六雑誌」としたのであるという。

その後の明六社員の参加、演説会への出席者、会場に築地精養軒を使用したこと、会でおこなわれた演説、論議の様子、さらに、精養軒で八年二月十六日から四月十日に中止するまで、演説聴聞希望者に、三十枚の入場券を渡し、席料として八錢ずつ徴収したことなども知られる。このチケットのことは、高木三郎宛書翰にも書いている。

毎月二回おこなわれた演説の筆記は、『明六雑誌』に掲げられているが、八年五月の「制規」改定で、毎会に「演説」をおこなうことが正式に社の建前となった。しかしこの重要な「明六社演説」について、正確な記録・演題のリストは残っていない。そこで、著者は、『明六雑誌』の論題の註記、『郵便報知新聞』の明六社記事、植木枝盛の日記に出てくる演者演題の記事などによって、『明六社演説一覧略表』を作製している。これによって、演説がおこなわれたけれども、その内容が『明六雑誌』に掲載されなかったもの、たとえば、第二部にのせられた西周の「海関税ノ説」(明治八年一月十六日)の存在も分かってくる。

次に各号の刊行月であるが、大体において各号の本文第一ページに印刷してある。しかし、なかには、それがないものがある。『郵便報知新聞』の七年三月九日の発刊告知文には、「毎月二次出版」と明記してあるが、この点は、最初から厳守されていない。しかも、各号の巻首には、上記のような例外はあるが、原則として何月刊と明記されている。しかし、これと実際の発行月日とが、かならずしも一致していない。この点について、著者は、『明六雑誌』の刊記と、『郵便報知新聞』の刊記とを照合して、両者の発行月日の記載を一覧表に作成している。これは、さきの演説一覧略表とともに、研究者にとって非常に有り難いことである。

以上のように、本書『明六社考』は、明六社ならびに『明六雑誌』に関する基礎的事項を検討して、これを概況したものであるが、この方面の研究者にとって、欠くことのできない参考史料を提供してくれるものである。

(清泉水子大学教授)

〔明六社考〕B6版・一二八頁・定価一、八〇〇円・立体社刊)